□煩悶に四五年を　越後　靜遠

私は幼少より畫が大好であつたが、天性無器用で、父や叔父の樣に書けぬけれど、職業の餘暇には文人畫と漢詩とを無二の友とした。其頃つく〴〵考へた「小學校教科書は小學教員の手で作たのが最適當である」と又掛圖も教員自身で描くが宜い、縱令畫は拙くも教育的に出來て居れば足ると。

教科書に就ては法令の束縛があつて自由ならねど、掛圖はぜひ教育的の物にしたいと思ひ思つて、遂に大膽にも無謀にも之れに着手した、幾多の苦辛は見事に失敗に歸した。

そこで參考の爲に西洋の掛圖を取寄せて見たに、云ふに云はれぬ妙味と價値とがあるので、彌々改宗に決心して、十餘年蒐集した漢畫の法帖扮本書器一切を賣つて掛圖と畫具に換へたが、餓鬼に鐵棒チツトモ手が動かぬ、勿論其筈で、毫も洋畫の智識の無い上に漢畫の粗放な氣習が遺つて害を爲すから。

大に困つて、東洋畫と西洋畫とは調和が出來るや否、換言すれば兩畫を折衷して（卑怯乍ら）吾が目下に橫れる過渡の困難を減し得るや否を諸家に質したが結局不可能！

殘念乍ら十五六年前の師範學校時代に立戻つて、米國版畫學書で鉛筆畫を習ひ復したが、性來の無器用で人一倍の練習を要すから、終に紙筆に窮して黑板白堊を用ゐるの止むなきに陷つた、是れが我が爲に新生面を開く基となつた。

ナゼならば、兒童に示す圖畫は大人に示す夫れよりも尙一層善く描かねばならぬ筈であるに、此頃の黑板畫は酷ひ者であつた、中學大學亦然りで、敎授用黑板畫の研究は最大急務であると信して、一身を之に投じた。

けれども黑板畫と云ふ一科が成立つては居らぬ、ツマリ圖畫の應用であると云ふ當時の狀態黑板畫を研究するには之に先だつて圖畫研究の要がある。色チヨークを用ふるに及んで色彩の研究は焦眉に迫つたが、當時は和製の彩畫帖は無い、我地方で洋畫をやる人は皆無だ、外國製の手本は高價で年に一册より外は買ふ力がない。

失望落膽、煩悶に四五年を經過した、此地獄の底で遙に一道の光明を認めた、夫れは大下先生の水彩畫の栞の出版で、年月は忘れもせぬ明治三十四年六月。

其後は行住坐臥此書を携へぬ事はない、初版五版二册は過度の使用に破れて、今は水彩畫階梯が代つて指導の任に當つて居る。

私が彩畫に志した動機（寧ろ經過力）はコンナに幾變轉を經たものであつた。

□二股尾の春

（大下先生筆繪ハガキを見て）　石見　孤崖生

おちこち罩むる花の霞、平和なる春の色は、こゝにもきざして、桃花今眞盛りのこゝ二股尾の里、氣は醉ふるにも似て、蝶は安らかに花間に眠る、オヽ平和なる村里よ！、千畝の青畑のかなた低う遠くたゞよへるは雲か將た連山か！。

□大きな聲で水彩畫とは　辻本　靜波

朱に交れば赤くなると古語にも言つてある通り、自分も水彩畫に志せし最初の動機は、實に我が朋友が然らしめたのである、この高尙優美なる水彩畫を學ぶべき動機を得せしめたのは、即ち我が朋友なのである。

自分は浪速の學校に居る時分、同室にて机を

並べ朝夕親んで居つた友は、最も水彩畫に熱心であつて、常に筆を採つて畫き、自慢顔に余に示すのである、其度ごとに余は水彩畫は最も高尚なものである、最も趣味のあるものであるといふ觀念を得たのである。

余一日友に向ひ「君水彩畫を畫くにはどーすればよいのだ、教へてくれ給へ」と、言ふと友は机の引出しから一册の本を出し余に示して「これを讀み給へ、水彩畫は如何なるものであるかと言ふ事がわかる」と、教へてくれたのである、これ即ち『水彩畫階梯』であつたのである、一讀また一讀……大に水彩畫の趣味を解したのである、そこでぢきに筆をとる氣になり一枚を畫いた、勿論畫にならなかつた、友に注意を受けて數枚を畫くとやつとの事でこれと言ふ一枚を得た、しかし完全とは言へない、大きな聲で水彩畫と言へないけれども大奮發して圖畫の教師に見せると初めてにしては上出來なりとの詞を給はり大に力を得益々この道を研究する樣になつたのである。

□御見舞に水彩繪具

美濃蒼海

相生橋　後藤百次

丁度私が高等科の二年の時でありました、永らく病氣で一室にふさいて居りますと、兄さんが私に水彩繪具を見舞としてくれました。其時から繪がすきになりまして、新聞の挿繪などを彩色しました事は非常に澤山でした。高等科を卒業するまでに一箱三錢五厘の甚だ悪い繪具でしたが十箱ばかりは使いました。中學校へ來てからは圖畫の時間は澤山あり、繪具は善いものが手にはいり、先生は非常に上手な方で、私は喜び勇んで益々勉强しまして、今ではすこしばかりは畫ける樣になりました。全く私は病氣見舞の繪具が動機となつたのでありまして、此樣な例は他にも少くないだろうと思ひます。餘事ではありますが先日時事繪葉書にあつた露の干ぬ間の朝顔を模寫して友人にやりましたら大層ほめて一句

朝顔の瑠璃の色こそ嬉しけれ
嬉しさに又かいて友人二人に出しますと共に
失望のわれに朝顔咲けりとは
朝顔に暫し見とるゝ我身哉

とありました之れも水彩畫の一の利益でせう